

雜 錄

鰓 脚 類 雜 記 (1)

上 野 益 三

△日本近海の *Penilia*.

我太平洋沿岸の浮游生物中に Cladocera に屬する *Penilia* がある。時季によつては夥しく出る最も普通なものの一つであるから、各臨海實驗所や水産試験場などで同定は出來てゐるに相違ないと思ふが、未だその種名の報ぜられたのを見ないのである。唯故遠藤吉三郎博士が大正7年發行の本誌(第30卷131頁雜錄欄)に“三崎の *Penilia*”と題して、同處のものは *P. schmackeri* RICHARD であることを記して居られるのと、谷津博士の動物分類表第二版97頁に *P. schmackeri* (三崎産)と出してゐるのを知るのみである。私は近頃京都帝大の赤塚助教授の青森縣淺蟲附近で採られた浮游生物中に多數の該種を見た。これは瀬戸、伊勢灣その他到る處の沿海に見られる。本種名の出所並に異名は次の如くである。

Penilia Schmackeri RICHARD (1894), Ann. des Sci. Nat. Zool. et Paléontol., 7° sér. Tome XVIII, p. 334, pl. 15, fig. 5, 7, 15; pl. 16, fig. 8.

P. orientalis POPPE (1888), Abhandl. naturw. Ver. Bremen, Bd. IX, s. 295.

P. orientalis SCOTT (1894), Trans. Linn. Soc. London, Second Ser., Vol. VI, Part 1, p. 133.

又前記遠藤博士の引用せられたものは *P. schmackeri* RICHARD として J. H. HANSEN (1899), Ergebnisse der Plankton Expedition der HUMBOLT-Stiftung, Bd. 11, s. 4, Taf. I, fig. 1-1 b. に出てゐる。さてここに厄介なことは本屬 *Penilia* DANA にはこの RICHARD 氏の *P. schmackeri* の異名として上に掲げた POPPE 並に SCOTT 兩氏の *P. orientalis* の他に *P. orientalis* DANA (1849), *P. avirostris* DANA (1849) があつて混雜を來し易い。遠藤博士は J. H. HANSEN 氏が *P. orientalis* DANA, *P. avirostris* DANA は *P. schmackeri* と同一ならんかと疑つてゐることを書いて居られるが、私も RICHARD 氏の圖並びに記載よりこれらの種の間にとれ程の確實明瞭な區別があるものかに迷ふものである。或は多くの標品を精檢すれば HANSEN 氏の考ふる如く *P. schmackeri* に合せられべきものかも知れぬ。因に RICHARD 氏によれば本種 *P. schmackeri* の要點は次の如くで、即ち殻の後縁中央部が凸圓狀をなしてゐること、その後腹部と尾爪との間に明かな縫合線がないことなどで他種と區別せられることになつてゐる。長さは 1 mm 内外。(挿圖参照)。

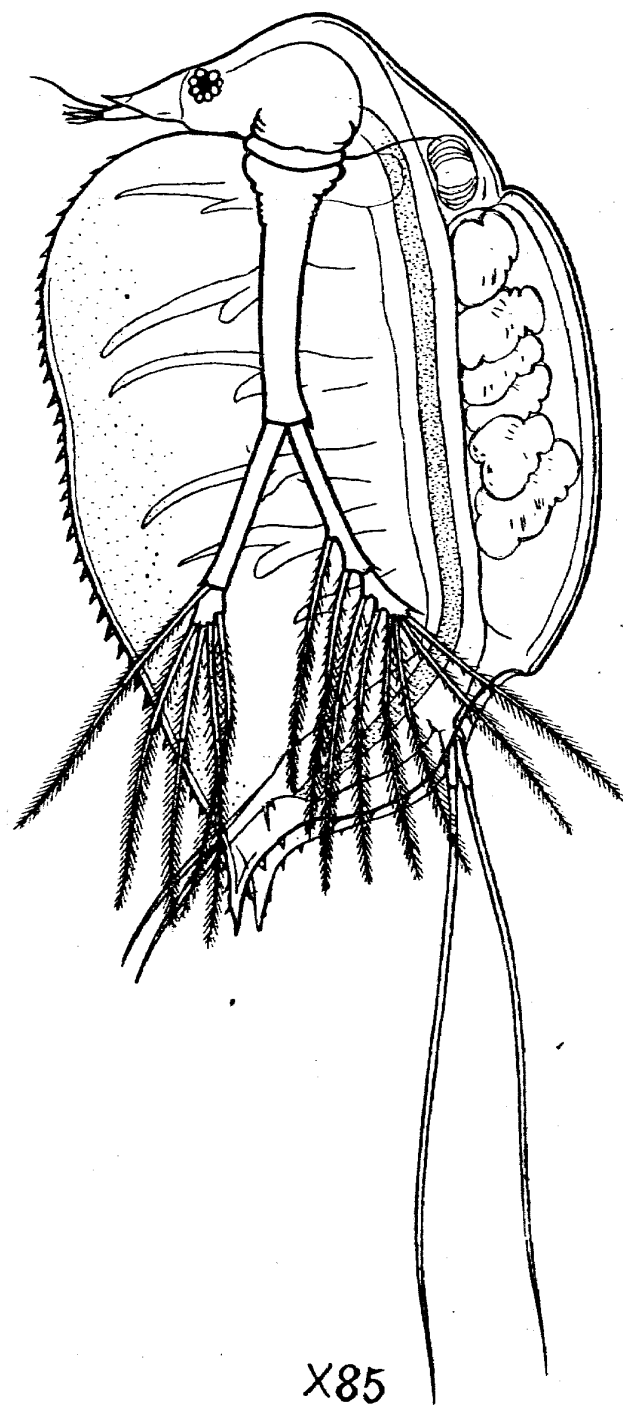
“Testae margo posterior in medio valde convexus, setae caudales longae,

apicem unguium terminalium superans. Unguibus terminalibus distincte uniaricularis, ad basin sutura nulla.”

本種は分類學上シダ科 Sididae に入れられる。各地の湖沼に普通な *Sida crystallina* や *Diaphanosoma brachyurum* と類縁の極近いものである。

△我邦の豊年魚。

豊年魚は一時に夥しく水田などに出現し、背を下にして一種特有の泳ぎ方をするのでよく世人に知られてゐるものである。我邦産のもの學名は往年石川千代松博士が詳細に研究せられて以來 *Branchipus* で通用してゐたが(石川氏、動物學雜誌第 7 卷、歐文欄 p. 98, Pl. XVII, fig. 1-6, 1895), その後 1910 年に至り EUG. DADAY DE DEÉS 氏の大著 „Monographie systematique des Phyllopoetes Anostracés“ (Ann. des Sci. Nat. Zool. et Paléontol., 9^e sér. Tome XI 1910) の出づるに及び、本邦産のもの即ち *Branchipus kugenumaensis* ISHIKAWA (1895) は O. A. SAYCE 氏の *Branchinella* 屬 (SAYCE, O. A., 1902, Proc. of the Roy. Soc. of Victoria, Vol. XV, N. S. Part 1, p. 224, Tab. 27-36) に入れらるべきものであることが明かになつた。それで我邦の豊年魚は *Branchinella kugenumaensis* (ISHIKAWA) とすべきこととなつた譯である。別に事新しく書き立てる程のことでないかも知れぬが、今迄にこの経過を記したのものが見

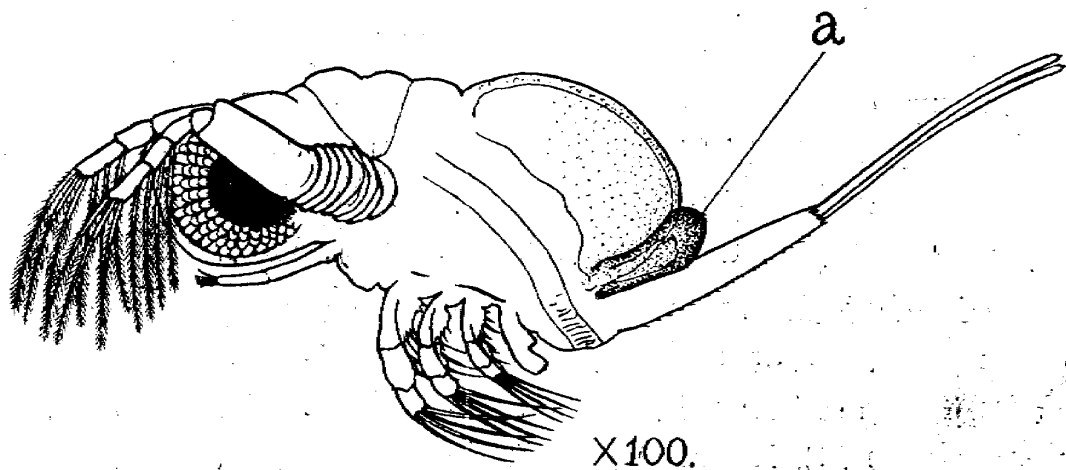


當らぬので、ついでに一寸記したまでである。尙川村教授著日本淡水生物學第一版上卷第 216 頁第 328 圖に朝鮮平壤で土居寛暢氏の採集された *Strepto-*

cephalus sp. なるものが出てゐるが、私は最近その原標品を検する機会を得て、それが *B. kugenumaensis* の非常によく發育したものに他ならぬことを知つた。ついでながら同標品は當時 KEILHACK の „Phyllopoda“ (BRAUER'S Süßwasserfauna Deutschlands, Heft 10) により然か定められたものであつたといふことである。

△奇妙な瘤を有する *Polyphemus*.

大正 5 年 6 月川村教授は日光中宮祠湖で Plankton を採集されたが、その中から *Polyphemus pediculus* (LINNÉ) の雌の育房に瘤状物のついてゐるものあるのを發見せられた。私は近時その標品を拜見したが、可成多數の個體にそ



ういふ瘤状の囊が認められた。これは育房の後腹側についてゐる中空の小さな瘤状囊で、その壁は可成厚く圓い孔によつて育房と交通してゐる。(挿圖 a)。中には大きくして育房の半に達する程のものもある。これが如何にして出來たものか、又如何なる運命のものか一切不明であるが、一寸面白いものであると思ふ。そして他の湖沼から採集された *Polyphemus* には絶えてかかるものを發見しないし、又かかるものを記したものも見ることがない。

△*Apus* 雜記。

日本産の *Apus* は昨年出した報告には *A. aequalis* PACKARD としてをいたが、これは多數の型を區別することが出来るものと思つてゐる。將來多數の標品を手にすることが出来たら精査しまとめて報告しやうと思ふ。本種は西南日本に廣く分布してゐて、殊に和歌山縣と山口縣から採集されたことが多い。私が昨年報文を出して以來和歌山縣御坊町芝口常楠氏から御坊附近のを山口縣の池田美成氏、山時隆信氏から山口縣大津郡三隅村の標品の惠與を受けてそれからいづれも前記の種であることを知つた。いづれも草取蟲と稱し百姓の間で問題になるとの教示を受けたが、私は別段實用上の功罪あるものではなからうと考へ

てゐる。前記芝口氏は同地に於ける氏の貴重な観察を示して下すつたが、それによつて同地のも矢張私が報じてをいたやうに僅かばかりの水田に限られてゐて、六月の夏至時分に水田に挿秧灌水後一週間乃至十日で出現し、その後一二週間は全盛となり、間もなくすつかり消失し去る由で、發生地には多數の脱殻も發見せられたとのことである。私はこの機會に上記諸氏の御厚意に感謝の意を表するものである。

Apus と同じ屬名が鳥のアマツバメにあつて、日本鳥學會編纂の A Hand-list of the Japanese Birds. (1922). の 102 頁には

Family Cypselidae.

Apus SCOPOLI (1777).

Apus pacificus (LATHAM.) Ama-tsubame. と出てゐて一寸まぎらはしいことになつてゐる。近頃靱山徳太郎氏からこれは *Apus* をやめて *Micropus* を用ふべきではなからうかとの御説を承つたが、私も *Apus* SCHAEFFER (1753) が先取權を有するものとして、この葉脚類の方に *Apus* なる屬名を用ゐたいと思ふ。尤も近頃獨乙の學者は葉脚類の *Apus* の代はりに *Triops* なる學名を用ゐるやうであり、Cambridge Natural History 中の Crustacea では鳥に用ゐられた *Apus* SCOPOLI が葉脚類の *Apus* に用ゐられてあつて頗る混雜してゐる。尙靱山氏の御教示によると Dr. E. HARTERT 氏は葉脚類の *Apus* は *Apos* となる筈のものの誤植であるから鳥の方に *Apus* を用ゐて差支ないと言つてゐるそうであるが、これら學名のいきさつについては將來尙多くの研究の餘地があるものと思ふ。終はりに臨み有益な御教示を賜つた靱山氏に厚く御禮を申上げる。

(1. VI. 1926, 京大動物學教室)

コノハテフの止り方及び飛び方

楚 南 仁 博

1. 止り方

コノハテフは WALLACE が Sumatra 産の *Kallima paralekta* に就て翅の表面は美麗であるが、裏面は形狀及び色彩が枯葉に似て其の習性が常に綠葉とか花には止まらないで枯葉のある梢に止まると云ふた其の記事及び挿圖は其後多數の學者に保護色の最好例として引用されるやうになつた。1909年に名和靖は沖繩縣石垣島に森宗太郎氏を派遣してコノハテフ *Kallima inachus eucerca* の生態を観察せしめ黒岩恒氏のコノハテフは止るときには頭を下向にすると云ふ話を